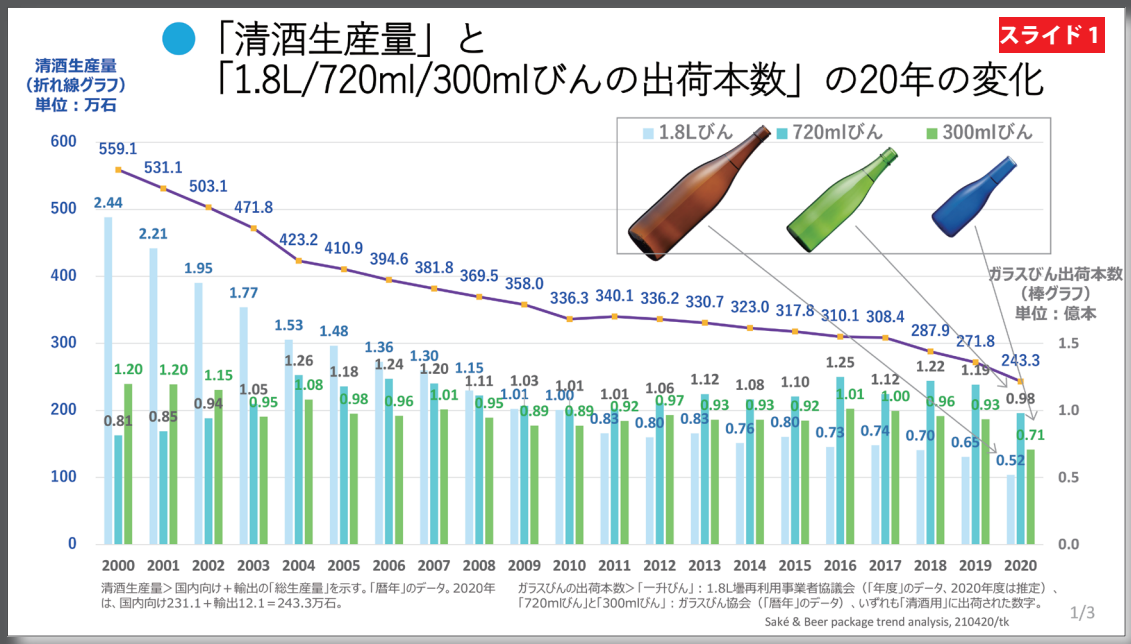
お酒 STATISTICS（オサケ スタティスティックス）

ちょっと意外な、お酒の統計情報紹介

ちょっと意外な酒類の統計、あまり知られていない統計データを、ビジュアルな資料でご紹介するコーナー。当社で蓄積しているデータを不定期連載でお届けします。

今回は、「清酒とビールのパッケージの変化とCOVID-19の影響観察」をご紹介します。

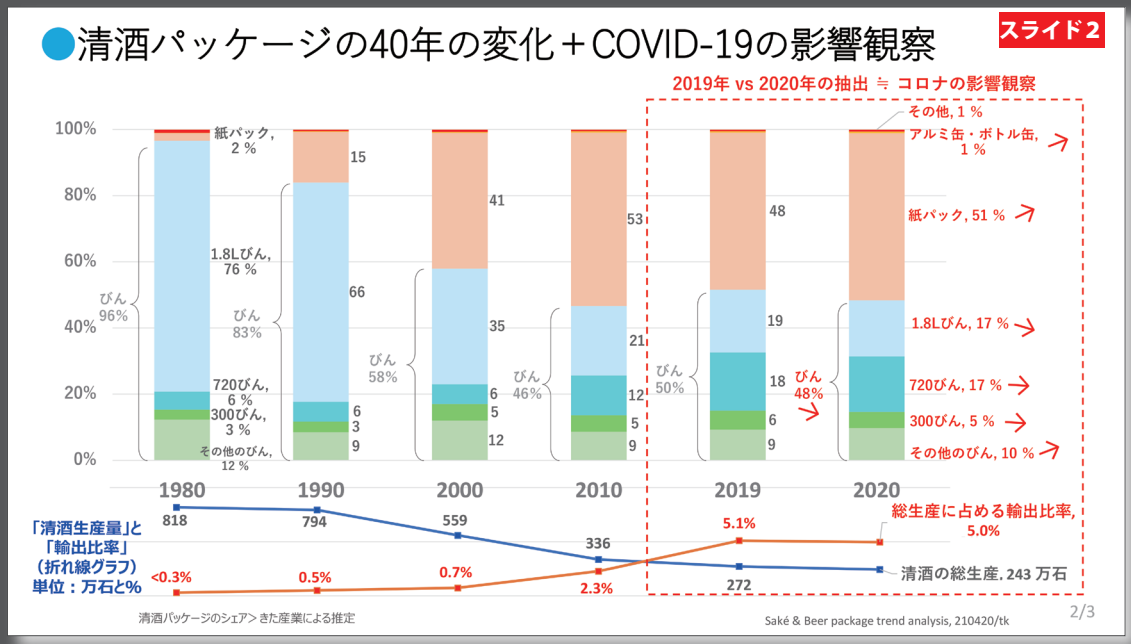


■**スライド1**　「折れ線グラフ」は「清酒生産量」。2000年以降の20年で559万石から243万石と▲57%。

■「棒グラフ」3本は「1.8Lびん」「720mlびん」「300mlびん」の出荷量。「1.8Lびん」は▲60%で「清酒生産量」以上に減少。（ただし、蔵元が自社回収して使用する1.8Lびんが一定量あり、数字に反映されているか不明）

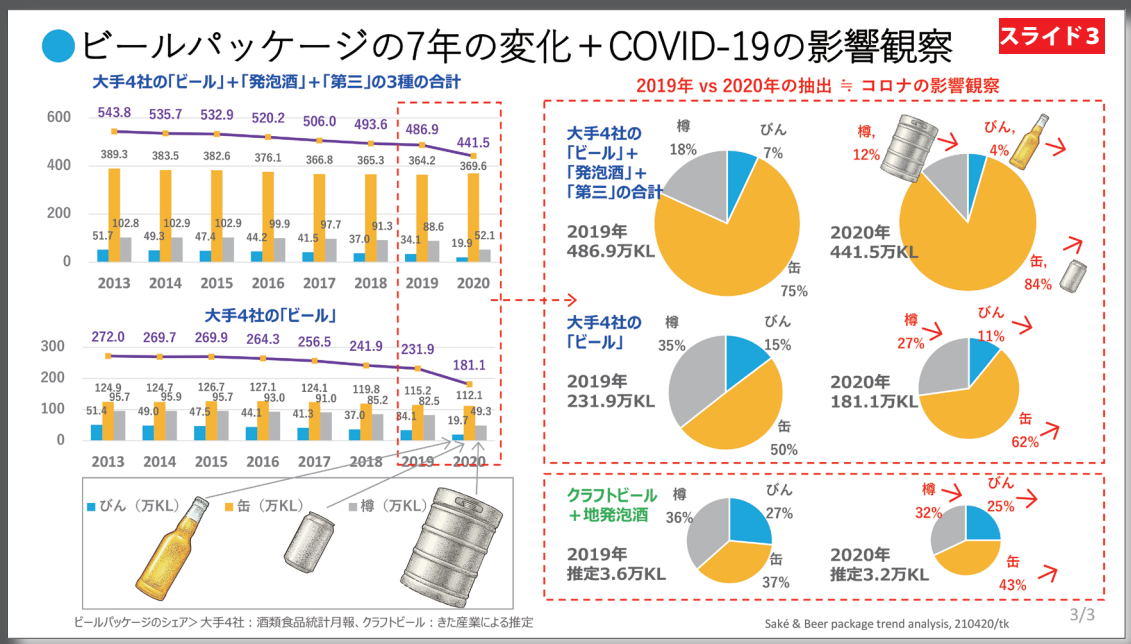
■「720mlびん」は（コロナの影響で2019→2020年は落ちたものの）、2000年以降、漸増傾向であるのがわかる。720mlは清酒のスタンダードびんになってきた。

■多くの食品・飲料で小容量化が進行する。清酒の小容量の代表である「300mlびん」も健闘。料飲店需要が大きいので2020年は落ちたが、今後も重要な容量だろう。



■**スライド2**　清酒のパッケージの変化を、10年刻みで40年間俯瞰したもの。1980年には「ガラスびん入り」が96%、「1.8Lびん」が76%だったが、現在はそれぞれ48%と17%まで低下。「紙パック」のシェアが上がった。

■ 右端の2本の棒グラフは2019年と2020年、すなわちコロナ前とコロナ後。紙パックは2010年ころ「50%超え」になって以降、近年は若干シェアを落とし気味だったが、コロナの影響で一気に数ポイントシェアをあげた。一方、ガラスびんは数ポイントシェアを下げた。



■**スライド3**　日本の「ビール類」の消費量の96%以上が大手4社（キリン、アサヒ、サントリー、サッポロ）の製品。大手4社の「ビール」の缶化率は2019年に50%だったものが、コロナの2020年に一気に62%まで上がった。

■「ビール＋発泡酒＋第三のビール」の「ビール類」合計で見ると、缶化率は75%から84%に。コロナは清酒では紙パックに、ビールでは缶に、有利に作用した。

■ ただ、棒グラフで過去7年の缶ビールの数量を見ると、増えていない。「アルコール飲料」全体では缶の数量は増えているが、主にRTDの増加による。「アルコール飲料」の7倍以上の消費量がある「清涼飲料」では、缶は減少傾向で、PETボトルが70%程度の圧倒的シェア。

■右下の円グラフはクラフトビール。クラフトでも缶化が急速に進む。現在70ほどのブランドが缶製品を販売している。

■（追記）スライドにはないが、酒類の2020年のトピックスとして大きい事は、2008年以降伸び続けたウイスキーが、マイナスとなったこと。ただ、売れ筋の「角ハイボール缶・濃いめ」がウイスキー規格からリキュール規格になった影響もあるようだ。（text＝t.kita）